

ctodermal tumor と診断した。術後、全脳及び局所照射 40Gy を行い、腫瘍は CT 上やや縮小した。

A-78) 水頭症で発症し、滑車神経麻痺を呈した延髄背側血管芽腫の一手術例

佐々木順孝・後藤 恒夫 (財)脳神経疾患
三浦 俊一・笹沼 仁一 (研究所付属南東
小鹿山博之・渡辺 一夫 (北脳神経外科病
院脳神経外科)

症例は22歳の女性。昭和60年4月、水頭症による頭蓋内圧亢進症状で発症し、MRI で異常を指摘されたが、脳室腹腔短絡術で軽快したため経過を観察していた。昭和62年7月下旬、左滑車神経麻痺による複視を訴え、約2週間の経過で軽快した。しかし昭和63年1月中旬から同様の複視と頭痛を訴え、再入院した。X線 CT では第四脳室を含む全脳室系の拡大と、延髄背側に造影剤で均一に増強される占拠性病変が認められた。MRI 矢状断で延髄背側から頸髄上部に T₁ 強調画像で低信号、T₂ 強調画像で高信号を示す腫瘍が明らかとなり、脳血管撮影で同部位に著明な腫瘍陰影が造影された。2月9日、延髄背側に発生した血管芽腫の診断で腫瘍摘出術が行われ、病理組織学的に血管芽腫と診断された。手術による新たな神経学的脱落症状の出現は認められていない。

以上、水頭症による頭蓋内圧亢進症状で発症し、経過中片側滑車神経麻痺を呈した延髄背側血管芽腫の一手術例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

A-79) 脊髄空洞症を伴った頸髄内血管芽腫の全摘出例

山本 祐一・羽場 勝彦 (福井県立病院
吉田 一彦・斎藤 研一 (脳神経外科)
村田 秀秋
浜田 秀剛 (金沢大学
脳神経外科)

症例は22才女性。昭和57年左前腕尺側から第IV、V指の温痛覚消失を認め徐々に左頸部から前胸部へ温痛覚低下は拡がり、58年某病院にて脊髄空洞症と診断された。60年には左下肢の跛行、61年には左手指の筋力低下、更に62年には右上下肢の異常知覚を認め、3月26日当院へ入院した。神経学的に皮膚分節で左は C6~Th6 の触、温痛覚低下、右は Th6 以下の触、温痛覚低下と左右 C6 以下の異常知覚を認めた。運動麻痺は左上肢は弛緩性、下肢は痙性で、左側は深部腱反射亢進かつ Babinski 反射陽性、前腕尺側の筋萎縮を認めた。脊髄造影で、延髄から第8胸椎レベルまでの脊髄の腫大を認めたが、syrinx は Delayed CT ミエログラムでも認めなかった。MRI

で、第4頸髄内に血流豊富な腫瘍性病変を認め、椎骨動脈造影では、第4~第6頸髄内に椎骨動脈の枝を栄養血管とする。著明な血管陰影をもつ腫瘍像を得た。5月15日、第2~第7頸椎の骨形成的椎弓切除術、髄内腫瘍全摘出術及び syrinx の開放を行なった。手術に際し、腫瘍への流入動脈の遮断の後に髄内腫瘍の en bloc な摘出に努めた。病理組織は血管芽腫であった。

A-80) 出血をくり返した大脳基底核部海綿状血管腫と思われる1例

一自然経過と CT 像の変化について一

兜 正則・久保田鉄也 (福井医科大学
白崎 直樹・古林 秀則 (脳神経外科)
久保田紀彦・林 実
嶋田 貞博 (春江病院)

過去7年間に少なくとも4回の大脳基底核部出血をくり返し、大脳基底核部海綿状血管腫が出血の原因と考えられた1例を経験したので報告する。症例は65才、男性。昭和56年2月に左片麻痺出現し近医にて頭部 CT 検査を受け右基底核部出血の診断をうけた。保存的加療にて軽快し、血圧コントロールも良好であった。昭和62年9月、再び左片麻痺出現、CT 上同部位に再出血を認めた。同年10月、軽い眩暈があり CT 上上記部位に新たな小出血を認めた。昭和63年2月8日、左片麻痺が増悪し完全麻痺となったが CT 上同部位に新たな小出血を認めた。頭部 CT 上の経時的な変化をみると初回の出血後に出血部位に一致して小さな結節状の淡い石灰化像を認め、その後石灰化像は多少大きくなったが、mass effect はなく、再出血の血腫消失に伴い石灰化像の変化や周囲に cyst と思われる低吸収域の出現を認めた。造影 CT では石灰化像の部位に軽度造影効果を認めた。以上の臨床像、CT、血管写所見をもとに、脳内海綿状血管腫の自然経過について考察したい。

A-81) 全摘出3年後に他部位に再発した脳内海綿状血管腫の1例

林 永俊・池田俊一郎 (上都賀総合病院
脳神経外科)

症例は10歳の女兒。昭和59年8月痙攣発作で発症、CT 上左後頭葉皮質下にまだら状の HDA を認めた。contrast medium によって mass は enhance されたが、血管写上は mass effect を示すだけであった。神経学的には左同名半盲を認めた。60年3月全摘出術施行し、組織学的に海綿状血管腫と診断された。以後軽快していたが、62年9月より頭痛を訴えるようになり、CT 上前

回入院時及び61年4月の follow up CT でも異常を認めなかった左被殻部にまだら状の HDA の出現を認められた。contrast medium によって mass はやはり enhance され、血管写上も前回と同じく mass effect だけが見られた。MRI では、SE 像で内部に石灰化を思わせる low intensity area を伴う high intensity な mass として、IR 像では hematoma と考えられる high intensity area を伴う low intensity な mass として tumor が描出された。63年1月全摘出術を施行した。

脳内海绵状血管腫は文献上その10%前後が多発性であるとされているが、臨床実際に多発性が確認された報告は多くない。また今回の症例のように時期を異にして他部位に発生を見ることは極めて稀であるので報告した。

A-82) 傍下垂体腫瘍手術における視機能予後の検討

浅利 潤・及川 友好 (福島県立医科大学) 脳神経外科
鈴木 恭一・佐々木達也
山尾 展正・児玉南海雄

傍下垂体腫瘍の手術において、視機能の温存は最も重要な目的の一つであるが、稀に視機能の温存が困難な症例を経験する事がある。今回、我々は自験例において種々の要因と視機能予後との関連を検討したので報告する。対象：過去5年間に当科にて開頭手術を施行した傍下垂体腫瘍44例を対象とした。内訳は下垂体腺腫24例、鞍結節髄膜腫9例、頭蓋咽頭腫7例、鞍上部胚細胞腫3例、脊索腫1例であった。全例において、同一術者が顕微鏡下に腫瘍を摘出し、1986年以降は術中 VEP モニタリングを施行している。

結果：手術より視機能の温存あるいは改善が得られたのは40例(91%)で、視機能が術後 permanent に悪化したのは4例(9%)であった。考察：術後視力障害の原因としては腫瘍の圧迫による視神経の菲薄化、視交叉周囲への穿通枝損傷などが考えられたが、原因の明らかでない症例もあった。また、視機能予後と腫瘍の種類、大きさ、術前の視力障害の期間、患者の年齢、眼底所見などとの関連について検討し、術中 VEP モニタリングについても考察を加える。

A-83) 小児トルコ鞍近傍腫瘍における下垂体機能障害

会田 敏光・宮町 敬吉 (北海道大学) 脳神経外科
阿部 弘
藤枝 憲二・松浦 信夫 (同 小児科)

小児脳腫瘍におけるトルコ鞍近傍腫瘍の頻度は多く、腫瘍により下垂体機能に特徴的な変化があるか検索することを目的とした。対象は、当科において経験した15才以下のトルコ鞍近傍腫瘍24例、内訳は、頭蓋咽頭腫7例、鞍上部胚芽腫14例、奇形腫2例、下垂体腺腫1例、ラトケ嚢胞1例である。治療としては、頭蓋咽頭腫は、手術あるいは手術+照射、鞍上部胚芽腫は1例を除き、照射単独治療をおこない、他の腫瘍においては、手術、手術+照射をおこなった。頭蓋咽頭腫は、初発症状は頭痛視力障害が多く、多飲・多尿は1例のみであった。鞍上部 germ cell tumor (胚芽腫、奇形腫)は全例多飲・多尿を初発症状としていた。下垂体機能検査は、治療前に、一部の症例では治療後におこなった。GH は全例に障害が認められ、LH、FSH、ACTH の順に障害の頻度が多く、TSH は、TRH 負荷により、低反応と反応遅延をみとめた。鞍上部 germ cell tumor における下垂体機能障害および尿崩症の頻度は頭蓋咽頭腫に比較して高く、両者とも治療後に改善は認められず、長期の補充療法を要した。

A-84) Dynamic CT による下垂体 microadenoma の局在診断

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳研究所) 脳神経外科
横山 元晴・田村 哲郎
土屋 俊明・伊藤 寿介 (新潟大学歯学部) 歯科放射線科

下垂体 microadenoma の局在診断における dynamic CT の有用性について検討した。<対象> 1984年から1987年までの間に dynamic CT (Dy-CT) を行い、手術所見の得られた microadenoma 21例を対象とした。内訳は ACTH 産生腺腫8例、PRL 産生腺腫8例、GH 産生腺腫5例、Hardy 分類では0型11例、I型9例、III型1例である。<方法> Anthropological basal plane に垂直方法の coronal scan で肘静脈より造影剤 50ml を用手的に数秒で注入し、注入と同時に Dy-CT を開始した。また Dy-CT 終了後しばらくしてから造影剤 50ml を bolus 注入し、50ml を点滴しながら通常の造影 CT (CE-CT) を行い Dy-CT と比較検討した。<結果> CE-CT では21例中11例(52.3%)で腺腫自体が正常下垂体と isodensity を呈したため、腺腫の局在診断は困難であった。一方 Dy-CT では21例全例で腺腫は正常下垂体に対し相対的 low density を呈したため局在診断が可能であり、また手術所見とも一致した。

<結論> Dy-CT は microadenoma の局在診断に極めて有用な方法である。